

## 【STEP19】 ～札の送りについて考えよう～

競技の中において、相手がお手付をした時、また、こちらが敵陣の札を取った時、相手に対して自陣から札を送る。この送り札は、何も考えずに送ってしまうてはならない。札一枚の送りが、試合全体に大きく影響を与えるからである。札の送りは、いろいろな意図を持って行なわれる。

初心者の発想には、自分の嫌いな札を送って自陣を万全にするとか、敵から送られてきた札を送り返すというわりと消極的発想と、自分の好きな札を送ってその札を攻めて取って相手にプレッシャーをかけるとか、とも札を敵陣にくっつけて一まとめにして狙って取って相手に脅威を与えるという積極的発想の二つがある。こうした発想に特に誤りがあるわけではないが、札の送りについて、一つの考え方を紹介しておこうと思う。札の送りは、その競技者がどのような送りをするかということでその競技者の「かるた」さえ決定づけてしまうほど、「かるた」において大きな比重を持っている。したがって、練習を重ねて自分の「かるた」に変化があれば、当然、札の送りも変化するので、一つの考え方にとらわれることなく、融通性を持って読んでもらいたい。

### 【札の送りのパターン】

#### 1. 『自陣内でくっついているとも札を別ける』

これは、とも札が自陣内でくっついていると本来三字決まりの札が二字で取られたり、二字決まりの札が一字で取られたりすることによる。自分にとって取りやすいかわりに、相手からも狙われやすいのである。自分にとって取りやすければ相手に狙われてもいいではないかという声もあろう。しかし、自陣の札一枚を敵に取られれば、相手から札が一枚送られてしまう。自陣の札を一枚取っても自陣の札が一枚減るだけである。何が言いたいのかというと、相手陣の札を取って自陣から札を一枚送るという行為は、試合の流れを自分で組み立てることに関与するということである。最初に並べる札は、アトランダムに札を持ってくるわけであるからまったくの偶然によるので、そこに自分の意志は関与しない（その持って来た札の並べ方には意志が関与しているわけだが…）。ところが、札を送るという行為には自分の意志が関与し、なおかつ、相手を送られて困るであろう札を送ったとしたら、それは札の送りだけで相手に対してプレッシャーをかけることになるからである。したがって、敵陣の札を取って

自分に有利になる札を送って試合を有利に導きたいという積極的な姿勢を持つことをおすすめしたい。このような考えに基づいて、敵から狙われやすい自陣にくっついているとも札を別けるように送る。こうした別れ札を見事に取り別けることが、相手にプレッシャーを与えることにつながる。また、相手がお手付をしやすくなる。この場合、自分にとってもお手付しやすくなるわけであるが、自分は常にこのようにお手付しやすい状況をつくって練習しているので、相手よりはそのような状況に慣れている分、自分はお手付をしないという自信を持って競技できる点で有利である。以上のような理由から、とも札を別ける送り、すなわち、相手にとっても自分にとっても取りにくい状況をつくる送りをしてほしい。

#### 2. 『敵陣より自陣に同音の札が多くある札を送る（敵陣になくて自陣に複数ある同音の札を送る）』

たとえば、敵陣に「た」の札が一枚しかなくて、自陣に「た」の札が五枚あったとする。そうすると「た」の札が詠まれた時、自陣の札を敵に取られる可能性が高いという状況といえる。したがって、こうした状況を是正するためにも「た」の札を敵に送る。たとえとして「た」の札を取り上げたが、何も「た」の札に限ったことではない。他の音で始まる札でも同様の状況が生じた場合も、同様に対処する。また、敵陣に一枚もなく、自陣にばかり同音で始まる札が何枚もある場合も同様である。

#### 3. 『自陣にある単独札を送る』

自陣に一枚だけその音で始まる札があり、敵陣にない場合、この札は相手から狙われやすい。敵陣に送って取るようにしたい。（もちろん、自陣にわざと残しておいて相手の気を引く罠の札とするという意図の場合は送らない。）ただ、これは二字決まりの札であることが好ましい。決まりの長い札、特に四字決まり以上の場合、自陣に置いてあったほうが囲いやすいし、敵陣を攻めに行っていたとしても、決まりを聞くまでに時間があるから戻りやすいためである。また、一字決まりの札の場合は、ケース・バイ・ケースといえる。敵に一字決まりの札が多く、自陣に一枚しかないというような場合は残しておくべきであろうし、自陣に一字決まりの札が多く、敵陣にないようならば送るべきであろう。自陣に様々な決まりの長さの札を持っているということは、相手にとっては、なかなか攻めにくい布陣なのである。さて、三字決まりの場合が難しい。自分の札の好き嫌い、お手付の可能性を考えあわせて、どちらの陣にあったほうが自分に有利かを判断しなければならないからである。なお、何字決

まりであっても、この場所であれば絶対に取りられない自信があるけれども他の場所に移った場合はどうか分からないという札を送る必要はないことを付け加えておく。

以上、三つのケースについて紹介したが、これが絶対という送り方ではない。あくまで一つの考え方として参考にしてほしいということである。また、試合の序盤・中盤・終盤によって、その場の札の残り方で送り方も変わるので、慎重に決めなければならない。セオリーよりも直感が優れている場合も少なくないということを忘れないでほしい。

もう一点だけ、札の送りに関して述べておこう。とも札を別ける場合であるが、どの札を相手に送るかということを決めておいて常に一定している人も多いということである。たとえば、「ながか」と「ながら」が自陣にある時、自分は必ず「ながか」を送るということを決めておくことで、送る場合の混乱（迷い）を減らすということである。但し、相手から逆に送られて来た時は困ることもあるので、柔軟な対応が望まれる。いずれにしても、送った札、送られた札については、常に暗記を入れなおし、間違えないようにしてほしい。

送り札をおろそかにしてはならない。送り札の一枚が勝敗をわけるのである。

